



三徳山（裏に不動堂）

観音

平成19年3月
第41号

発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-4
真言宗 正観寺
小出 真行

三徳山参拝

昨年、十月二十九日～三十日に天台宗の三徳山「開山一千三百年祭「炎の祭典」」にご縁をいただきました。当日は天台密教の彩灯護摩（紫燈護摩）を眼のあたりにし、作法等は概ね大差はありませんが、気付いた点が二点ありました。一つは護摩壇の設え方で

二段構えの護摩壇でした。（片方を祈願札用、もう片方を火渡り用）やくよけのハチマキを巻き、歩幅に並べてある段木を渡りますが、その間から残火が（下の方）湧き出



真如 外に非ず

身を棄てて何くんんか求めん

（心理を悟る者でもない自分自身である。）

般若心経秘鍵

る様に工夫されてい
ました。

宿泊は、三朝温泉
の三朝館、心地よい
お風呂にゆっくりつ
かり、心身共にリフ
レッシュ。

翌朝、宿入橋とい
う赤い橋を渡り登山
道に入り、かずらの
根を頼りに急斜面を

両手、両足、体全体を使ってルートを選んで登っていき最初の難所「かずら坂」にはびっくり……。かずら坂を越え、しばらく進むと次に待ち受けているのが、第二の難所「クサリ坂」、投入堂までの道中に存在する重文の一番下に位置する「文殊堂」の手前にあり、大きな岩塊の上から垂れているクサリだけを支えに登っていきます。

文殊堂を過ぎると次に「地藏堂」ですが、この途中に第三の難所「平岩」があります。大きなラクタのこぶのような岩の上を歩くだけです周囲



には掴まる木々はなく、左右は深谷。見下ろしてもすがるところがない岩伝いの道は、昔修験者が一心に念仏を唱えながら通ったことを不思議に連想させます。地藏堂、鐘樓堂を過ぎると、最後の難所「牛の背、馬の背」があり、ここでは平均台を渡るようにバランスをとりながら岩の上を歩きます。

これを越せば、一番上に位置します重文「納経堂」が岩のくぼみにひっそり建てられ、納経堂を過ぎると「観音堂」「元結掛堂」「不動堂」と続きます。



不動堂の建つ岩角をまわるとオーバーハングした岩窟に国宝「投入堂」が突然姿を現します。この投入堂を目の前にした瞬間、誰もが「アッ」と驚嘆。後部を岩屋にすえ前部は断崖に向けての舞台造り。近づく道すらない垂直な崖に光り輝いているようで建っているというよりも浮かんでいると言った表現が適切な気がします。そもそも一三〇〇年前に役行者が三枚のハスの花びらを散らし「仏教に縁のあるところに落ちるように」と祈ったところ、その一枚が三徳山に落ち、修験道の行場として開いたのが始まりとされ、法力で岩屋に



投げ入れたと言われることからこの名がついたとされます。

入山した全員が無事下山。輪光院にて精進料理に舌鼓、一路広島へと帰路につきました。

この一泊二日の「祭典」にご縁をいただき、ただただ健康であることに感謝したい思いです。



投げ入れたと言われることからこの名がついたとされます。

Ⅱ「即身成仏」を目指す真言行者における「三密行」の重要性

小出 真弘

第二節 「即身成仏義」における

二經一論八箇の証文と二頌八

句の詩

空海の主観的独断によってというのではなくて所依の經典がある。前の節でも述べたが当寺の経や論等には三劫成仏、隔生成仏、遠劫成仏等を説いて即身成仏は成しえないというのである。この節に於いて最初に私は即身成仏の証拠づけをする。「即身成仏義」に於いて

①「問て曰く、諸経論の中に皆三劫成仏と説く、今即身成仏の義を建立する何の憑據か有る」とある様に、即身成仏するには何らかの証拠があるという顕教の問答に対して、空海は「即身成仏義」に於いて

②「秘密藏の中に如来是の如く説きたまう、かの經説いかん。」

と述べており、秘密藏の中にのみ如来が説いていると記されてある。それは何であるかというところ空海が、撰述した二經一論八箇の証文である。二經とはもちろん「大日経」「金剛頂経」の二大經典で、一論とは「菩提心論」である。その中に八箇の証文が見出されてある。

ではその一つ一つを挙げてみると、最初に「金

剛頂経」系の經典に4箇ある。

③(一)「この三昧を修する者は現に仏菩提を提す。」不空訳

とあり「この三昧心を一境に專注させる作用」とは大日如来の一時頂輪王の三摩地である。

④(二)「もし衆生あつてこの教に遇うて昼夜四時に精進して修すれば、現世に歡喜地を証得し、後の十六生正覚を成ず。」「金剛智訳」

とあり「この教」とは法身仏自らの内証せる三摩地の大教主であり、「歡喜地」とは顕教でいうところの初地とは異なり、密教のいうところの初地の事で金剛薩埵の本初の心地である。「十六生」とは十六の融生ではなく、十六生大菩薩の功德をこの肉身の上に發生する事である。

⑤(三)「もしよく勝義に依つて修すれば、現世に無上覚を生ずる事を得。」

とあり、「勝義」とは最も勝れた道理絶対的真言の意味である。

⑥(四)「まさに知るべし、自身即ち金剛界となる。自身金剛となりぬれば、堅実にして傾壊なし我金剛身となる。」

とあり自身が金剛身となり、そうすれば堅実で傾いたり壊れたりする事なく自分自身金剛となる。

次に「大日経」系に就いて二箇ある。

⑦(五)「この身を捨てずして神教通を逮得し、大空位に遊歩して、而も秘密を成ず。」

とあり「大空位」とは、法身が大虚空と同じように無碍にして、ありとあらゆる萬象を包み含んで

常恒であるから大空といい、諸法の伝住する所なので位と云うのである。「身秘密」は法仏の三密など覺者も見する事が出来ないものであるから、ましてその下位にある十地の菩薩なども窺う事も出来ない、故に身秘密と名付けた。

⑧(六)「この世に於て悉地に入らんと欲はば、その所応に随つてこれを思念せよ。親子尊の所に於いて明法を受け觀察し、相応すれば成就を作す。」

とあり、「悉地」とは真言命咒を誦持する功德によって不思議の通力を成就し、持明の悉地と更に法身仏のさとのり体験を成就する法仏の悉地を開いた。

次に「菩提心論」に於いて2箇ある。

⑨(七)「真言法の中にのみ即身成仏するが故に、是れ三摩地の法を説く。諸教の中に於いて闕して書せず。」

とあり「この三摩地の法を説く」とは法身が自ら証した三摩地である。三摩地こそ菩提心の内容である。「諸教」とは多受容身説の顕教である。

⑩(八)「もし人仏慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速かに大覺の位を証す。」

とあり、大覺とは釈迦のさとのり事を云い、釈迦は宇宙の実相をさとつて自己を迷いから放したただけでなく、他者をさとらせる行を円満させている。少し詳しく言うと、もしも人がさとのりの絶対智を求めてそうした求める心に深く到達したならば、この我々の肉体のまま、たちまちに偉大なるさ

とりの境地を明かす事が出来る、という意味である。さとの知恵を得ようとすると心を菩提心と云っている。密教ではこの菩提心を捨てる事は、自らの精神的な生命を絶つ事であるから、生命に交えても菩提心を捨ててはならないと説き、ことに空海の真言密教では菩提心を捨てない事を三摩耶戒の一つとしている事によっても、それがいかに大切なものであるかが知られる。

以上の八箇の証文に於いて即身成仏の方法を証拠づけている。これは実践的な方面で真言密教の三摩地を修ずれば、即身成仏しうるのが明らかになった。

(次号へ続く)

おがむこと

よく腹をたてる怒りっぽい人は仏さまをおがんで下さい。相好円満なお姿をおがんでいますと、相手の立場に理解がもてるようになります。物事や出来事は是非善悪がよくわかって、無暗に腹がたたなくなり、争うことは人を傷つけ、わが身を傷つける愚かなことであると気がつき、心ははればれとしてきます。

せっかちでいつもイライラしている人は仏さまをおがんで下さい。微笑を豊かにたたえられた尊顔をおがんでいますと、いつの間にか心が落ちついて気持がゆったりし、せかずあせらず悠々と暮らしができるようになります。

疑い深い人は仏さまをおがんで下さい。やさし

い慈悲のおん眼をもって、いつも私を見守って下さる仏さまをおがんでいるうちに、人を疑う不安な気持と疑心暗鬼からくる苦しみが消え失せて、なにもかも仏さまがご存知だという心強さが湧いてきて、ビクビクしなくなります。

悩みをもって人は仏さまをおがんで下さい。あの温情にみちたお顔をじっとおがんでいまして、今のこの苦難を切りぬけてゆく道が自然に見つかりますから、何をこんな悩むのか、寝ても起きても仏さまと一緒に暮らしているのだという安心が得られ、すべての悩みはさらりと解けます。

人生を悲観している人は仏さまをおがんで下さい。境遇が悪い、身の立つ瀬がない、思うようにならないからこの世が嫌になり捨て鉢がちになります。生きる価値のないものはありません。自分が生きているということは何かの道が与えられているのです。仏さまのお手をごらん下さい。様々な形をし、いろいろなものをお持ちになっているでしょう。そのお手ををおがんでいますと、きっと生きてゆく道がわかってくるでしょう。



平成十九年度 年間行事予定

- | | |
|---------|--------|
| 一月一日〜三日 | 修正会 |
| 一月十八日 | 初観音 |
| 二月三日 | 星祭(星供) |
| 四月八日〜十日 | 小豆島巡拝 |
| 七月八日〜九日 | 石鎚山参拝 |
| 八月十九日 | 地藏祭 |
| 十二月三十一日 | 年越祭 |



参加者募集

- 一、平成十九年四月八日(日)
 - 『小豆島巡拝』 十日(火) 二泊三日
 - 費用 三七、〇〇〇円
- 二、平成十九年七月八日(日)
 - 『石鎚山参拝』 九日(月) 一泊二日
 - 費用 三三、〇〇〇円

※お問い合わせ

〇八二―二八二―五六六二迄